

平成 25 年度

学位論文審査報告書

(後期課程：博士)

小樽商科大学大学院

商学研究科現代商学専攻

平成25年度博士後期課程学位論文審査報告書

平成26年2月21日

審査員 (署名)	(主査) 沢 真	伊 藤 一
	玉井 健一	高宮城 朝則

学位論文提出者	学生番号	氏 名
	201182	長村 知幸

1. 学位論文題目

北海道のワイン・クラスター形成プロセスに関する事例研究

2. 論文概要

以下別紙

3. 所 見

(1) 論文テーマの重要性
(2) 論述の一貫性
(3) 先行研究及び関連分野に関する理解
(4) 研究方法の妥当性
(5) 独創性
(6) 体裁

4. 評 価

- (1) 論文審査合否 : 合格 不合格
- (2) 最終試験合否 : 合格 不合格

別紙

学生番号 201182

氏名 長村知幸

1. 学位論文題目 北海道のワイン・クラスター形成プロセスに関する事例研究

2. 論文概要

本論文は北海道で形成されつつあるワイン・クラスターに関する研究である。特にクラスターの形成が如何なるプロセスを経るのかという点に重点を置き、これを詳細なインタビュー調査により解明しようとするものである。概要は以下の通りである。

第1章においては、まず、著名なポーターによる研究をもとに、クラスターとはその前提となる要素条件、需要条件、関連支援産業、企業戦略等のいわゆるダイヤモンドが近接する地域内に存在することであると、クラスターに関する基本的な概念、既存研究について言及している。さらにクラスター形成に関連する社会学及び経営学の分野での関連事項についても考察を加えている。そして、これまでのクラスター研究の多くが静態的なものに留まっているとし、本研究のような動態的な研究の必要性を説いている。

第2章では海外及び国内のワイン・クラスターに関する先行研究をレビューしている。世界のワイン・クラスターにはフランス、イタリアなどの欧州のみならず、米国、チリ、オーストラリア、南アフリカなどでも形成されているが、特に米国のナパ・バレーについての研究が盛んである。しかし、ナパ・バレーの研究も現状分析に留まっており、その形成プロセスには言及されていない。また、日本国内では山梨県のワイン・クラスターの研究が多く、そこではワイナリーを中心にブドウ栽培農家、支援機関等との連携や、ワイナリーとブドウ栽培農家間のネットワーク、さらには中核企業であるメルシャンによる中小ワイナリーへの技術移転などの既存研究が紹介されている。

第3章では本研究の方法論について述べており、まず、クラスター形成の歴史的経緯、中核企業の戦略、行政の支援、クラスター内のプレーヤー間の相互作用、という研究課題を設定し、これらに基づく調査内容を構築している。その上で、北海道内の三大ワイン・クラスター（空知、後志、上川）を取り上げ、各プレーヤーに対する広範かつ詳細なインタビュー調査を行っており、その対象はワイナリー5社、業界団体、行政機関22団体に及ぶ。また、インタビュー調査に際してはそれぞれのクラスターにおいて、上記の研究課題を中心に、パイロット調査を行ったうえで、本格的な調査を行っている。

第4章は第3章の方法論に基づく事例研究であり、空知、後志、上川地方のワイン・クラスターについてインタビューをもとにそれぞれの特徴を抽出している。その結果、空知では鶴沼ワイナリーが中核企業となり、①栽培試験などの研究、②耕作放棄地の活用、③他のワイナリーへの技術指導、などの役割を果たしていたことが明らかとなった。

後志では古くからのフルーツ栽培の歴史があり、そのため、栽培技術の蓄積があり、そ

れは主に各農家のなかで受け継がれてきた。中核企業としては北海道ワインと余市ワイナリーがあるが、前者は行政機関とも協力しながら研究開発に努め、後志のワイン造りを牽引する立場にある。後者はJAや契約農家との連携に力を入れていることが明らかとなった。

上川のワイン・クラスターは富良野市と協働によるところが大きく、米の生産調整への対応も含め、富良野市が中心となり、新たな産業として育成された。そのため、各種行政機関が協力しながらワイナリーとブドウ栽培農家を育ててきた。特に富良野市ぶどう果樹研究所が中核企業の役割を果たしている。

このように、それぞれの地域におけるワイン・クラスター形成の歴史的プロセスや地域特性、中核企業の役割などの相違が詳細に記載されている。

第5章では事例研究から導き出された以下の3つの仮説を提示している。仮説1は非公式なネットワークは効果的な知識移転に貢献する、というものである。これは地縁、血縁などによる非公式な顔の見える関係が様々な形で知識の流れにプラスの影響を与えることを意味する。仮説2は業界団体の存在は集団的学習効果をもたらす、というものである。業界団体などを通じて形成されるプレーヤー間の公式な相互作用が全体のレベルアップに寄与していることを意味する。仮説3は中核企業の経営哲学とネットワーキング戦略がワイン・クラスター形成プロセスのなかで重要な機能を持つ、というものである。各クラスターには中核企業が存在し、これらを中心としたネットワークがクラスター形成に寄与していることを意味する。

結論部である終章では事例研究をもとに北海道のワイン・クラスター形成プロセスでは以下の3点が明らかとなったとしている。それらは、①地縁、血縁による長期的な協力規範が構築されている、②業界団体が同業者ネットワークの形成を促す、③中核企業の戦略が要素条件の構築に貢献している、である。これらは理論的インプリケーションとなるものでもある。

3. 所見

(1) 論文テーマの重要性

クラスターに関する研究は多数あるが、産業によりそれぞれのクラスターの特性は大きく異なる。ワイン・クラスターについても有名な産地であるナパ・バレーや山梨についてはいくつかの事例研究があるが、近年生産が伸びている北海道のワイン・クラスターを本格的に扱った研究した論文は皆無に等しく、また、農業を基幹産業とする北海道における食品関連のクラスター研究としても重要性を持つ。食のクラスターが北海道経済の発展に寄与することが期待されるなか、時宜を得た研究テーマであるといえる。

(2) 論述の一貫性

明確な問題意識の提示からはじまり、これを明らかにするための記述は論文全体を通して一貫している。論理的に構成された章立てに基づき各章での論述が進められており、論述にぶれは見られない。文章自体も簡潔かつ明瞭であり、読者に正確に内容が伝わるものである。

(3) 先行研究及び関連分野に関する研究

本論文を作成するにあたって筆者は入念な先行研究を行っている。特にポーターをはじめとするクラスター関連の先行研究は主要な文献を網羅している。また、近年増加している、クラスター形成に関連する経営学の分野の研究や社会学の分野の研究についても十分に読み込んでいる。上記の内容については個別論文も執筆しており、さらに学会報告も行っている。以上の点から博士論文としては十分な範囲の先行研究を網羅し、それらについての深い知見を有するといえる。

(4) 研究方法の妥当性

第3章で方法論についても述べられているが、本研究は Facts Finding 型の論文であり、詳細かつ広範囲なインタビューを行って事実の発見に努めている。北海道のワイン・クラスターに関する先行研究がほとんどないため、まず、事実を着実に積み上げる方法は極めてオーソドックスなものである。本論文は北海道内のワイン・クラスター形成プロセスを対象としているため、時系列での変化をつぶさに考察する必要がある、このこともインタビュー調査の必要性を高めている。さらに、インタビューの対象が企業や業界団体、行政機関など多岐に渡り、それぞれの果たす役割が異なるため、計量的な分析になじまないものであり、その意味でも深く掘り下げられたインタビューは重要であり、方法論的にも極めて妥当である。

(5) 独創性

何よりもこれまでほとんど研究がなされていなかった北海道のワイン・クラスターを研究対象と定めた着眼点に独創性がある。このことは研究者としての高い能力を示すものでもある。また、クラスター形成のプロセスを動的に考察しようとする試みも静的な分析が多い、クラスター研究のなかでは異彩を放っているといえる。この点に注目したことも本研究の独創性の証左の一つといえる。それらは詳細なインタビューとこれをもとにした記述により、見事に表現されている。

(6) 体裁

クラスター関連の先行研究のレビューから始まり、続いてワイン・クラスターに関する先行研究を網羅している点は論文の導入部分としてオーソドックスな形である。先行研究

のレビューから導き出される研究課題とこれを明らかにするための方法論を第3章で提示し、これに従って、第4章では極めて詳細な事例研究を行っている。そして、最終的に発見事実から今後検証されるべき仮説も導き出しており、拡張性を持ったものとなっている。全体を通じて論文の体裁としては極めて妥当なものである。